令和５年度

平泉町内遺跡発掘調査報告会資料

令和6年3月2日［土］
15時00分～17時00分

平泉文化遺産センター

－目次－

今年度調査箇所位置図

1. 柳之御所遺跡第 85 次調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

2. 宿遺跡第８次調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

3. 鈴沢の池跡第４次調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

4. 倉町遺跡第 15 次調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

5. 観自在王院跡第 15 次調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

6. 毛越寺跡第 22 次発掘調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

7. 坂下遺跡第 16 次調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

1 柳之御所遺跡 第85次
2 宿遺跡 第8次
3 鈴沢の池跡 第4次
4 倉町遺跡 第15次
5 観自在王院跡 第15次
6 毛越寺跡 第22次
7 坂下遺跡 第16次
▲ 県教委調査
● 町教委調査
0
1000m

調査箇所位置図

１．柳之御所遺跡第 85 次調査について

岩手県教育委員会　高橋　祐
岩手県教育委員会　長谷川　伸大
(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　西澤　正晴

１　はじめに

柳之御所遺跡は平泉の中心部に位置し、北上川沿いの河岸段丘に立地しています。遺跡は２条の大規模な堀に区画された内側（以下、堀内部地区）と、その外側（以下、堀外部地区）の２地区に分かれています。これまでの調査により、奥州藤原氏が築いた平泉文化の内容が多くの遺構・遺物により示され、堀内部地区の範囲が『吾妻鏡』に記載されている奥州藤原氏の政庁「平泉館」であると考えられてきました。

岩手県教育委員会では、平成 10 年度（1998）に現場事務所を設置し、遺跡の内容の把握と整備に係わる情報収集を主な目的として、柳之御所遺跡の調査を継続して行っています。

堀外部地区については、奥州藤原氏の一族や家臣団の屋敷地などとする見解もありますが、未調査の範囲も多く、不明の点が残された状態です。また、これまでは政庁区域と考えられる堀内部地区を史跡公園として整備を行ってきたところですが、堀外部地区については、今後、史跡公園として整備する上で、基本情報が少ないことも指摘されています。

そこで、岩手県及び岩手県教育委員会では令和２年５月に「平泉文化の総合的研究基本計画（第３期)」（以下、基本計画）を策定し、堀外部地区を継続して調査を実施していくことになりました。

研究テーマ①：「柳之御所遺跡の考古学的研究」（堀内部地区と堀外部地区との関係性）

【研究目的・目標】

- 未調査が多い堀外部地区の様相を把握し、今後の整備の材料として蓄積
- 堀外部地区の検討を行い、堀内部地区や他の遺跡との比較検討を実施
- 道路跡、区画の検討を実施（遺構の変遷、様相等の検討）

（「平泉文化の総合的研究基本計画（第３期)」より抜粋）

基本計画の４カ年目にあたる今年度の第 85 次調査は、北西端にあたる区画溝（第１・第２区画）の接続部の内容確認と、道路跡の中央部分の延長部の内容確認の２点を調査目的として、２箇所（以下、便宜的に西・東区とする）の調査を実施しました。（図１・写真１）。

２　西区（第１区画と第２区画の接続部）

（１）調査目的

ア　南北方向の区画溝と考えられている 24SD4 と 24SD13 の重複関係の確認

イ　区画溝（24SD2 と 24SD13）の接続部の確認

（２）調査成果（写真２）

アでは 24SD4 が 24SD13 を壊して掘り込んでおり、過去の調査成果どおり 24SD4 が新しい溝跡で

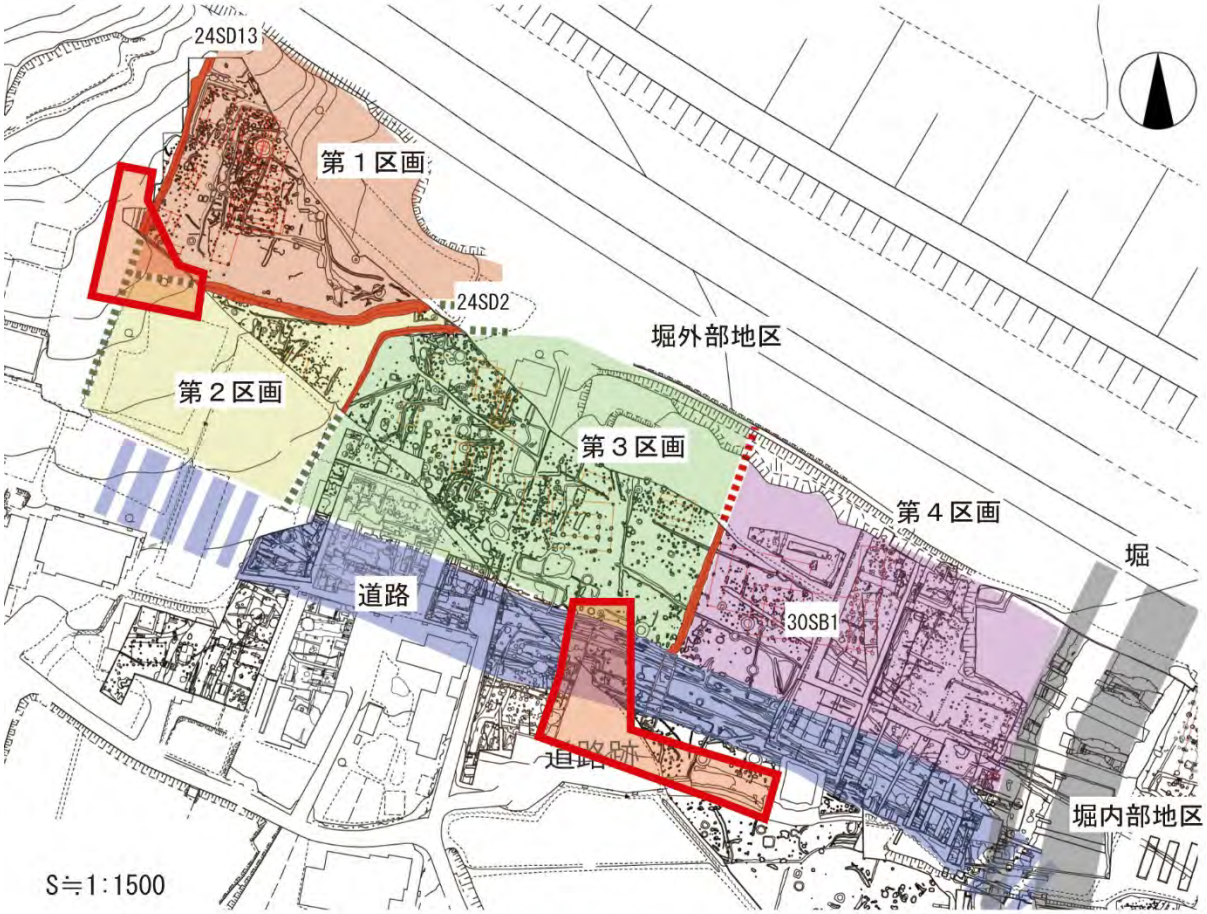


図１　堀外部地区の区画及び発掘調査箇所

写真１　発掘調査箇所

あると確認ができました。同遺構はさらに南側へ延びて、調査区外へ続くこともわかりました。

また、壊される 24SD13 は南側へ延びないこともわかりました。堆積土の様相が後述する 24SD2 古と似ていることから、接続部でL字状に曲がり 24SD2 古となるとも考えられます。

東西方向に延びる 24SD2 では二つの溝跡が重なっていることが新たにわかりました（24SD2 古と 24SD2 新）。**イ**の接続部では、南北方向の 24SD4 と東西方向の 24SD2 新の堆積土の様相から同時期の遺構であることがわかりました。

以上の結果、溝跡の構築は、南北方向では 24SD13→24SD4、東西方向では 24SD2 古→24SD2 新、接続部では 24SD4＝24SD2 新となり、24SD4 と 24SD2 新が新しい溝跡と考えられます。

また、24SD13 と 24SD2 古が同一遺構であるならば、L字状の溝（24SD13 と 24SD2 古）→24SD4・24SD2 新の順番になるとも考えられます。その他、今回の調査では、土坑や整地層、柱穴も見つかっており、遺跡の北西端まで土地利用がなされていたことがわかりました。

３　東区（道路跡の延長部）

（１）調査目的

ウ　新しい時期の道路跡の南側道路側溝と考えられる溝跡（80SD1）の延長の確認

エ　古い時期の道路跡の南側道路側溝と考えられる溝跡（29SD1）の延長の確認

オ　新しい時期の道路跡の南側道路側溝（80SD1）に並行する塀跡（80SA2）の延長の確認

カ　石敷き遺構の性格の確認

（２）調査成果（写真３）

ウ・エともに確認ができました。両端の溝跡から推定される道路幅はともに約 12mです。現代の道路と同様に側溝が作られており、その痕跡が今回の溝跡であると考えています。

オも確認ができました。ウの道路が使用されていた時期に南側を遮蔽していたものと考えられます。塀の構築は丸い木材を並べた掘立柱塀であろうこともわかりました。

カは過去の調査で見つかっていた遺構です。道路に関連する遺構かもしれませんが、性格の確認には今後も検討が必要です。その他には井戸跡と考えられる土坑や溝跡、多くの柱穴、近世の暗渠や集石遺構も見つかっています。

４　まとめ

西区ではこれまで区画をなす溝跡が接続するであろうと推定されていた箇所を調査で確認することができました。その構築には時期差があることから、いわゆる小区画や大区画といわれる区画のあり方について検討する資料が得られました。

その他、整地層などの一部の遺構が南北方向に延びる区画溝の外側（西側）で見つかっていることから、西側の高館方面へも土地利用がなされている可能性も出てきました。

東区では中尊寺方向に延びる道路跡の側溝と考えられる溝跡の延長を確認することができました。周辺の遺構とともに道路跡の時期差について検討する資料が得られました。

今後もこうした基本的な遺跡の情報を蓄積し、当面の目標である堀外部地区の性格（機能）を解明するまで、内容確認の調査と研究を継続していく予定です。

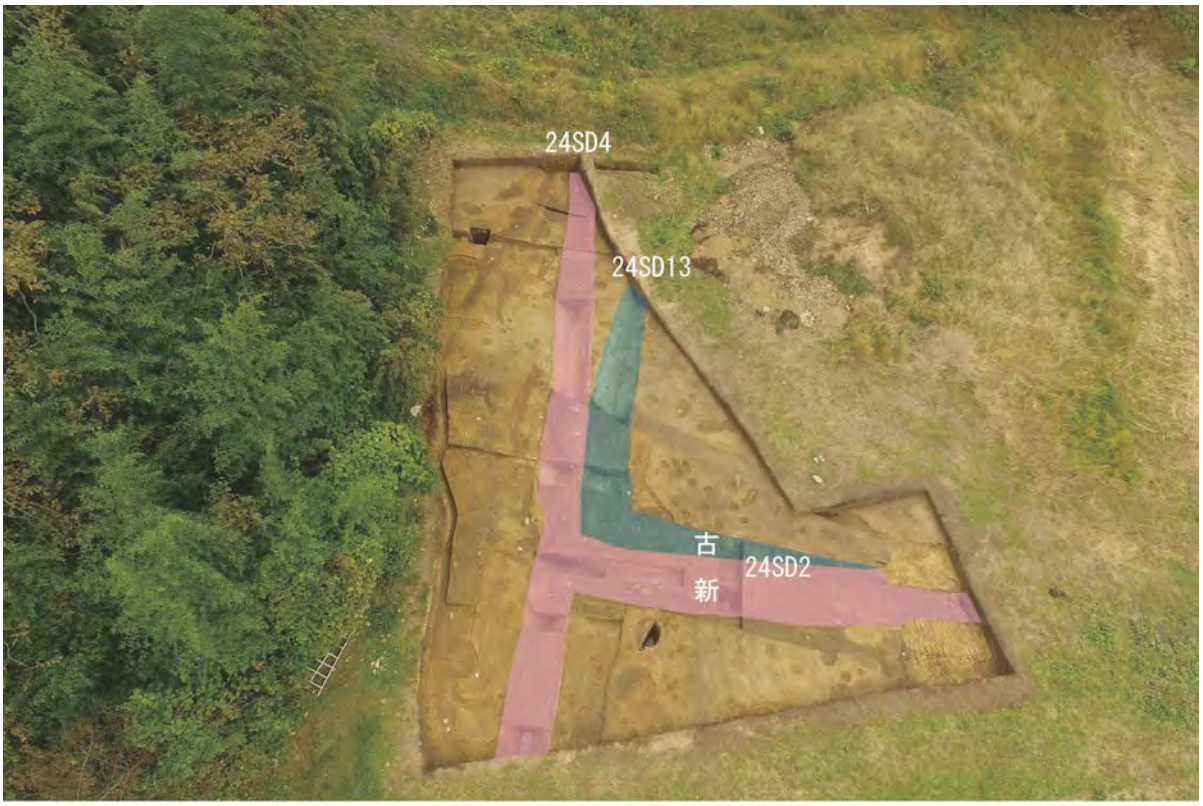


写真２　西区調査区全景（上が北）

区画溝の構築の流れ　→

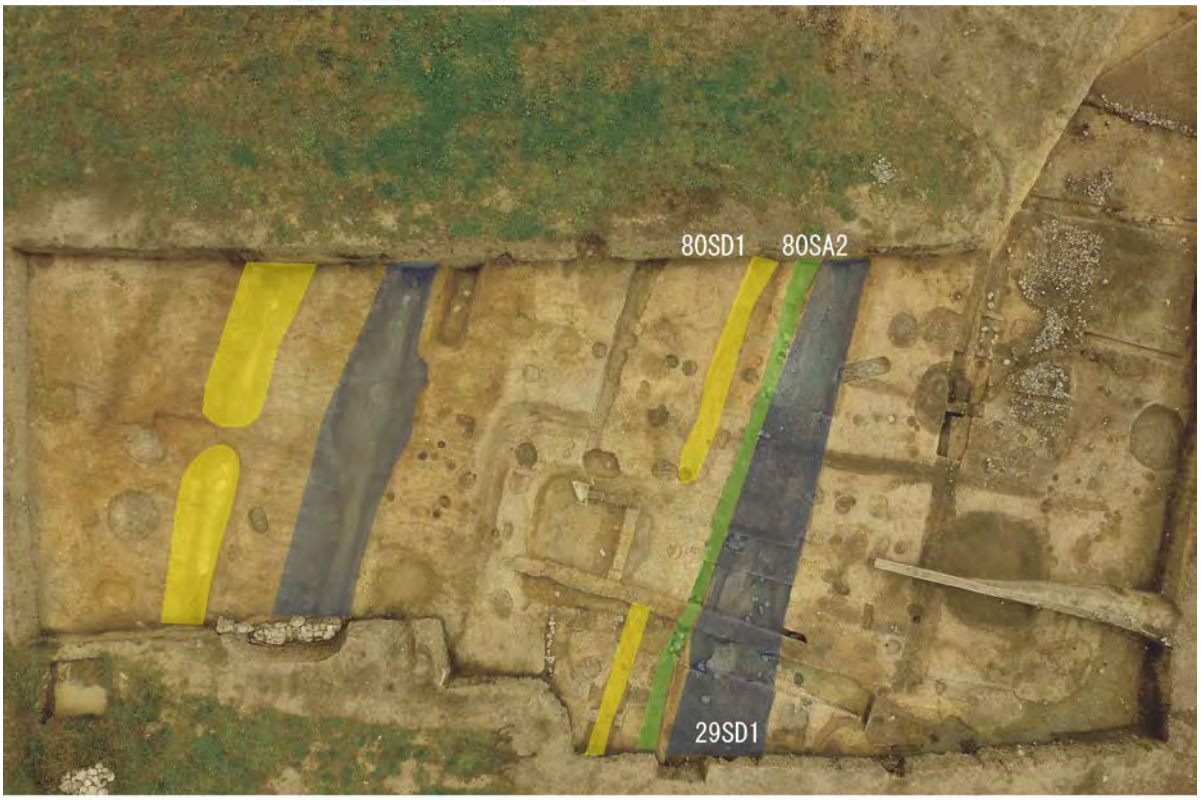


写真３　東区調査区北側（上が東）

道路側溝の構築の流れ　→　塀跡

２　宿遺跡第８次発掘調査

菅原計二

概　　要

平泉の南に位置する宿遺跡の発掘調査で１２世紀の土器よりも古い特徴をもつ「ロクロかわらけ」と「柱状高台」の二種類の土器が見つかりました（写真・図)。これらは１１世紀の安倍・清原氏から１２世紀初め頃の奥州藤原氏初代清衡の時代の土器と推定されます。同じ土坑から９～10 世紀とみられる内黒土師器の破片も出土しました。調査地点は国道４号から高田前工業団地に向かう町道に面した水田です。西側では開田や水田耕作のため地山まで削られて遺構は確認できませんでしたが、調査区中央から東側で土坑４基、溝跡５条が見つかりました。

検出遺構

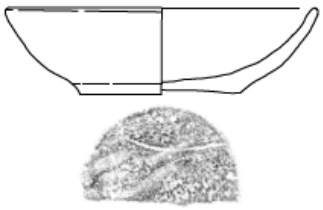
二種類の土器が見つかった土坑は、東西約４．５㍍×南北２．５㍍、深さ５０㌢の楕円形で人為的に埋め戻されていました。この他の土坑や溝跡からは１２世紀の手づくねかわらけや渥美産陶器甕の破片が出土しました。南側で検出した土坑は直径約３㍍の大きさで常滑産陶器甕が出土し、１２世紀の井戸跡の可能性があります。

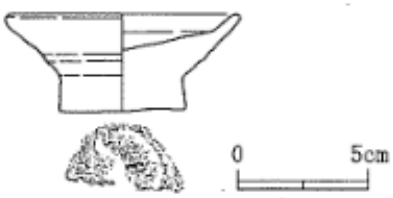
出土遺物

ロクロかわらけ、柱状高台、手づくねかわらけ、渥美・常滑産陶器甕、内黒土師器、須恵器、鉄製品、石器などが少量出土しました。古い特徴をもつ「ロクロかわらけ」は直径１３．２㌢、高さ３．６㌢で底面に回転糸切り痕が残り、体部は１２世紀のロクロかわらけと比べて薄く丸みを帯びて口縁まで立ち上がります。「柱状高台」は１２世紀のものよりも高台がやや低く、体部は斜め上に傾いて坏に似た形です。

ロクロかわらけ

柱状高台





１１世紀から１２世紀初め頃とみられる土器（写真・図）

宿遺跡第８次調査区　全景（南西から）

土器が出土した土坑断面（南東から）

南側の土坑（西から）

溝跡と土坑（北東から）

調査区全体（西から）

３　鈴沢の池跡第４次発掘調査

鈴木江利子

概　　要

鈴沢の池跡は白山社遺跡・伽羅之御所跡と志羅山遺跡・泉屋遺跡との間にある沢状の低地に位置しています。４次調査区は遺跡中央北側に位置しています。周辺には北東側に白山妙理堂が位置し、西隣で行われた白山社遺跡３次調査（平成４年実施）では、12世紀の石積護岸や橋脚が見つかっています。

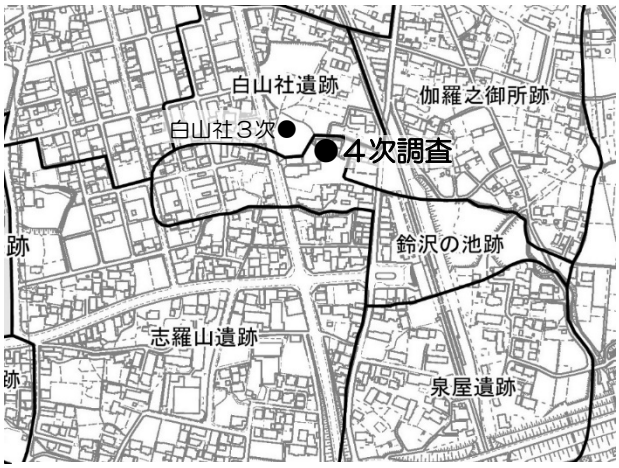


図１　調査区の位置

写真２　調査区の位置

写真右下の駐車場わきが今回の調査区、左上に白山妙理堂の屋根が見えます。

検出遺構

12世紀の石積護岸と護岸を埋め立てた整地が見つかりました。

見つかった護岸の長さは14mで「し」の字に似た様に延びています（写真２）。北東から南西方向に長くのびて南西側で方向を南東側に変えています。護岸には 20 ㎝程の石を中心に積んでいますが 40 ㎝や 10 ㎝大もありました。石積の上には砂が堆積しています。その上には黄色の粘土が埋まっていました（写真３）。砂は池として使われていた時期に堆積したもので、黄色の粘土は池が使われなくなってから人が埋め立てを行った土と考えられます。埋め立て後は、一時的に水が流れた痕跡があり、その後、水田耕作が行われていたようです。

写真２　見つかった護岸

写真３　中央の護岸：石の上に砂が薄く堆積し、その上に黄色粘土が埋まっていました。

護岸の時期は、護岸から 12 世紀のかわらけが見つかっていること、埋め立てた粘土からもかわらけが若干が見つかったことから、12 世紀の護岸と考えられます。池が使われなくなってから、12 世紀に池を埋め立てたと考えられます。

写真４　調査区南側（北東から）：護岸の高さは 70 ㎝、上から下の石までの距離は 2.4m あります。

（参考）　白山社遺跡第３次の護岸（北から）北東側の護岸：20～30 ㎝の川原石が綺麗に積まれていました。

４　倉町遺跡第 15 次発掘調査

鈴木博之

概　　要

個人住宅建築に伴い、観自在王院の毛越寺通りを挟んだ南側で調査を行いました。今回調査を行った場所は 12 世紀の毛越寺から東へ延びる大路の南側にあたり、調査区の西側約 90ｍの地点では、鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』に記された「高屋」と想定される建物跡や、多くの中国産陶磁器などが平成 14 年度と平成 17 年度の発掘調査で見つかっています。「高屋」は宝物などを収める建物と考えられており、このことから倉町遺跡の「高屋」が見つかった周辺は重要な遺跡として認められ、国史跡「柳之御所・平泉遺跡群」の一部に指定されています。

検出遺構

掘立柱建物跡７棟、溝跡５条、土坑１基、柱穴 29 個が見つかりました。

見つかった掘立柱建物跡のうち３棟は、掘方を含めた直径 60～80cm 前後の柱穴の建物で、「高屋」で見られるような直径１ｍ前後の大きな柱穴には若干及ばないものの、屋敷を構成するような柱穴です。また、『吾妻鏡』では「観自在王院の南

調査区全景（北から）

大門の南北路、東西より数十町に及びて、倉町を造りならべ、また数十宇の高屋を建つ」と書かれており、「倉町」を構成する建物であった可能性があります。埋まっている土の様子から 12 世紀よりも新しいと考えられる建物跡も見つかっており、平泉のメインストリートに面していたこの場所では何度も建物の建て替えを行いながら土地利用されていたことがわかりました。

近隣の調査では 12 世紀の毛越寺から東へ延びる大路に伴う道路側溝が見つかっていますが、今回掘った場所は現代の住宅の水道管などにより壊されていて明瞭に道路側溝といえる痕跡は見つかりませんでした。しかし、この道路側溝は毛越寺前から平泉町学習交流施設エピカの前を通って平泉駅の東側まで続いていることが確認されており、今回の調査区でも建築に影響のない場所では地下に保存されているものとみられます。

12 世紀の道路想定位置

出土遺物

かわらけが 9 号袋（25cm×15cm）半分、中国産磁器 1 点、国産陶器 5 点、近世陶磁器 4 点、近現代陶磁器 12 号袋（34cm×23cm）1 袋などが出土しました。

5　観自在王院跡第 15 次発掘調査

鈴木江利子・島原弘征

はじめに

観自在王院跡は、奥州藤原氏二代基衡の夫人が建立した寺院の跡で毛越寺の東隣に位置しています。『吾妻鏡』には観自在王院（阿弥陀堂と称する）は基衡の妻（安倍宗任の娘）が建立したことが記されています。

境内の大きさは南北 250m、東西 120m程で、敷地の北側に大阿弥陀堂・小阿弥陀堂の跡があり、その南側には舞鶴が池と呼ばれる園池があることが、これまでの調査で確認されています。昭和 49～53 年度に史跡整備が行われましたが、再整備に向け平成 30 年度から発掘調査を開始しました。

検出遺構

昭和 52 年の４次調査において、観自在王院西側から南北方向の石敷道路跡が発見されました。この石敷道路は毛越寺と観自在王院との間にあり、道幅は約 30m、路面には３～20 ㎝の石が敷かれていることが確認されました。今回は、

写真１　観自在王院跡遠景（左に毛越寺、右に観自在王院跡、その間に南北道路が位置します）

貴人の乗り物である牛車（ぎっしゃ）の駐車場である車宿(くるまやどり)の北側を対象に調査を行い、これまで１時期と考えられていた石敷は新旧２時期あることが分かりました。

（１）新しい時期の石敷

調査区中央から西側では、３～７㎝のやや小さめの石で構成された石敷が見つかりました（写真２）。小さい石のためか、後世に失われて石同士の間に土が入り、隙間が見える状態でした。この石敷は中央が高く西側に向かうにつれて低くなっており、その影響から西側では古い石敷と接触し、一部大きい石が混在しています。北側でも古い石敷と接触しているため、西側と同様の様子が窺えました。また、東側では新しい石敷は確認できず、同一面に黄褐色粘土が広がっていました。

写真２　新しい時期の石敷（中央北：西から）

写真３　古い時期の石敷（調査区東側：西から）

（２）古い時期の石敷

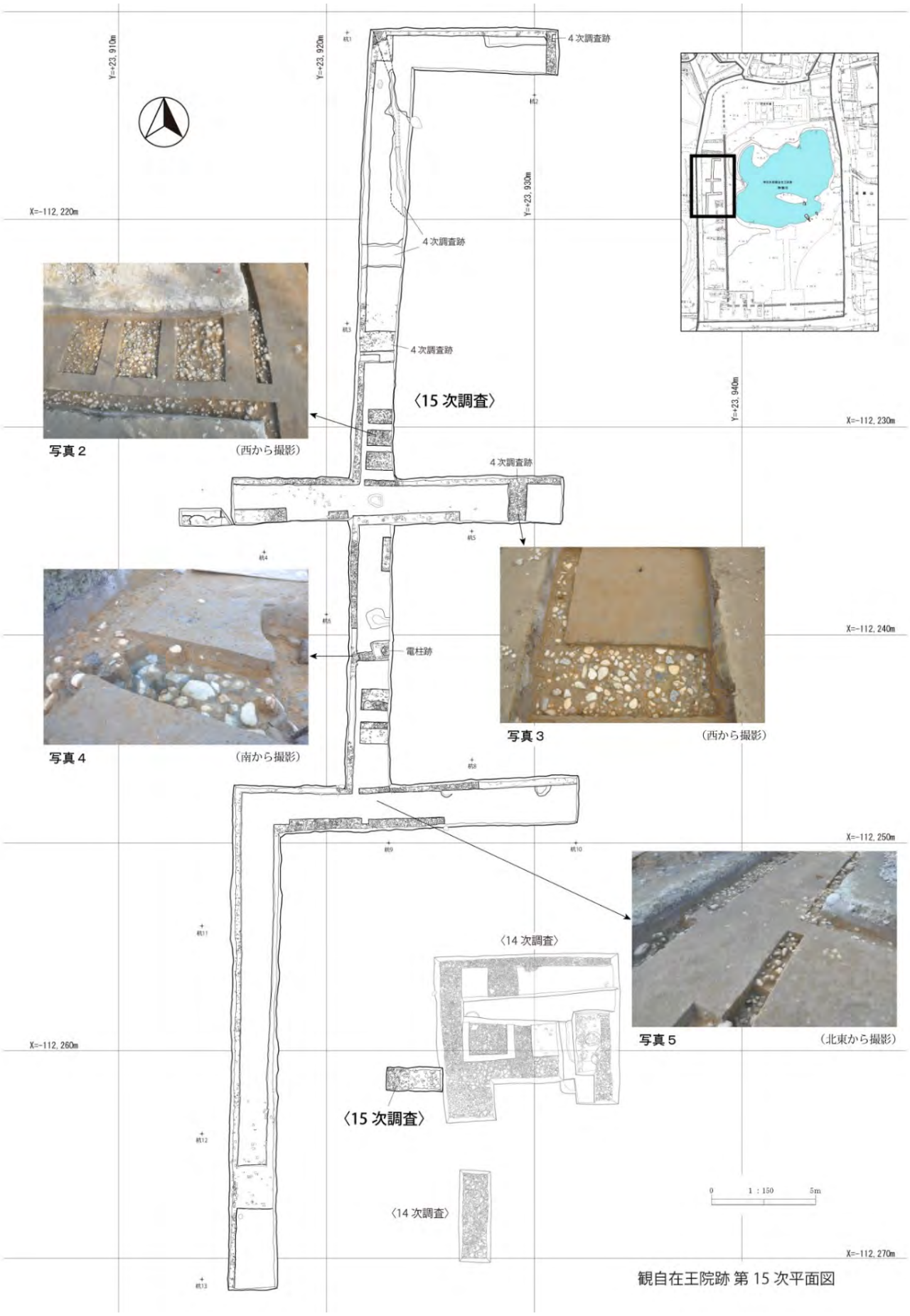
古い時期の石敷は 10～15 ㎝の比較的大きな石で構成され、隙間なく埋込まれていました。前年の 14 次調査で見つかった石敷きは古い石敷で、連続して繋がっていることが分かりました。

新しい時期の石敷は、南側では古い石敷の上に粘土を盛ってから石を敷いていましたが、北側の方では古い石敷を造り直して敷いていました。

写真４　新旧重なる石敷（調査区中央：南から）

まとめ：今回の調査では、石敷が新旧２時期あることが確認されました。この新旧の石敷の時期は 12 世紀の奥州藤原氏の時代ですが、出土遺物が少なく、具体的な時期は分かりませんでした。恐らく、毛越寺の造営や改修などの工事と連動して石敷も設置、修繕されたものと考えられます。

写真５　観自在王院跡第 15 次調査区全景



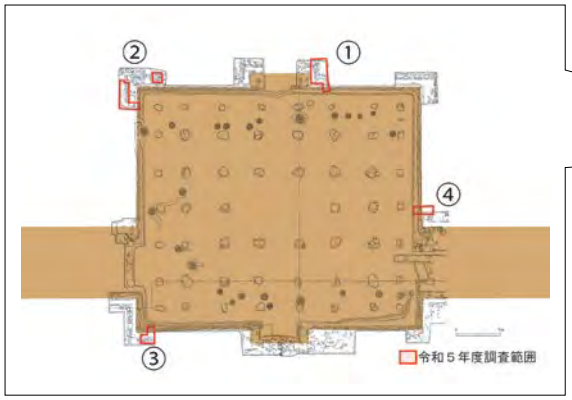
観自在王院跡 第15次平面図

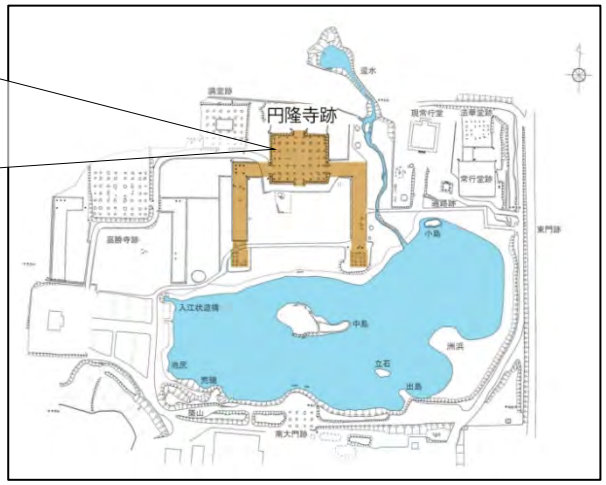
6　毛越寺跡第 22 次発掘調査

鈴木江利子・島原弘征

概　　要

特別史跡、特別名勝の二重指定を受けている毛越寺は奥州藤原氏二代基衡が造営を開始し、三代秀衡が完成させた寺院で、大泉が池と呼ばれる庭園と金堂円隆寺を中心とするお堂で構成された浄土庭園として知られています。円隆寺は南大門から見て池の北側真正面にあります。お堂は失われましたが、建物の基礎に当たる基壇が、南北 25 ㍍×東西 30 ㍍、周辺から 80～90 ㌢の高さで残っています。その上にある礎石の大きさや配置から当時のお堂の大きさや柱の太さがうかがえます。円隆寺は昭和 5 年と 33 年の調査で礎石や基壇、地覆石（じふくいし）や雨落溝（あまおちみぞ）などの存在が確認されています。今回は将来的な修理に向けて、基壇の残存状況を確認するため調査をおこないました。





円隆寺調査位置図（丸数字は写真と対応）

検出遺構

調査箇所は①背面の階段脇②基壇北西側③基壇南西側④東側中央の 4 か所で、地覆石と雨落溝が良好な状態で残っていました。

①背面の階段脇

円隆寺は正面と背面の中央に階段が設置され、左右両側には翼廊（翼状の廊下）が続いていました。ここでは、写真奥の基壇側に地覆石が確認できます。基壇を昇り降りする階段は基壇よりも外側に出ることから、雨落溝も階段に合わせて屈曲している様子が見えます。

右／①背面の階段脇（北から）

② 基壇北西側（西から）

基壇は、盛土の外側を石で覆う壇上積基壇（だんじょうづみきだん）でしたが、現在は、基壇を覆っていた石の大半は失われ、その裾にあたる地覆石（じふくいし）のみが残っています。本来であれば、地覆石の上に羽目石（はめいし）という板状の石があったはずですが失われていました。地覆石の外側には、屋根から落ちてくる水を受けた雨落溝があります。屋根の端の位置が分かる雨落溝のおかげで、建物（特に屋根）の大きさを知ることができます。雨落溝の外側には粘板岩を並べて奇麗にしていました。さらに外側は玉石が敷き詰められていました。

上／円隆寺全景（北西から）現在、基壇上には松や杉があり、その間から建物の柱を支えた礎石が見えます。手前の北西隅の調査区を撮影したのが写真②

上／② 基壇北西側（西から）

③ 基壇南西側（西から）

右側が基壇で、①②同様に地覆石と雨落溝が並行しています。地覆石には羽目石と合わせるため刻みが施されていました。

右／③ 基壇南西側（西から）
一番右側の石が地覆石で左側の参列に並ぶ粘板岩との間が雨落ち溝になる。

７　坂下遺跡第 16 次発掘調査

菅原計二

概　　要

中尊寺北参道入口から南側の県道瀬原三日町線（旧国道４号）に面した宅地で調査を行いました。地形は関山丘陵東裾の緩斜面で北上川西岸の沖積地縁辺に当たります。１つの溝跡から明治時代以降とみられる陶器土瓶が出土しました。当地点は平成１０年代に県道の高さまで厚く盛土されていました。

検出遺構

調査の結果、表土から１．７メートルの深さでトレンチ西側から２条の溝跡、東側から低地に向かう落込みを検出しました。２条の溝跡からは明治時代の陶磁器が出土し、埋土の様子や出土遺物から明治以降に埋められた溝のようです。東側の落込みからは手づくねかわらけや土師器片が少量出土しました。

出土遺物

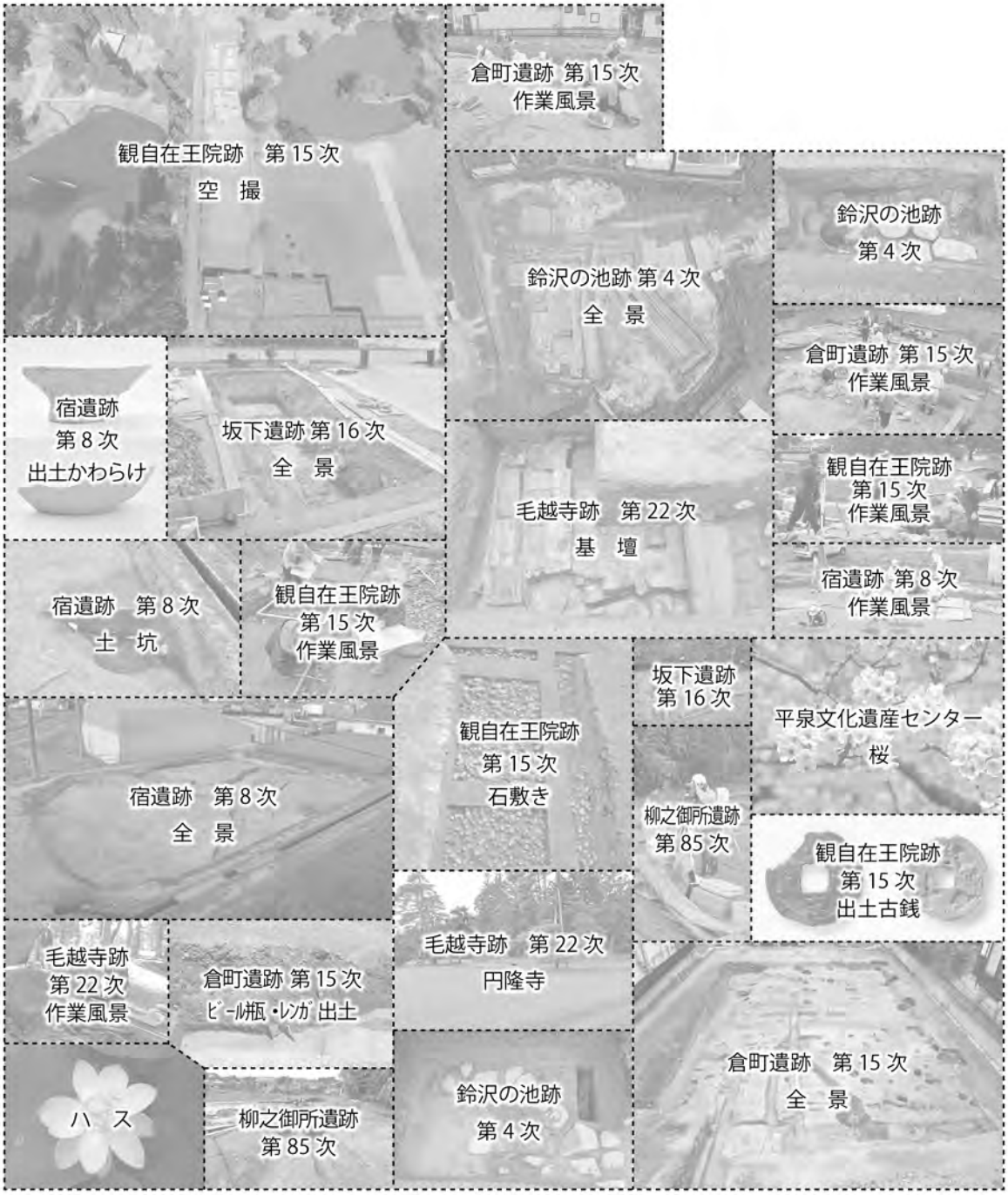
かわらけ（12 世紀）少量、土師器甕（9～10 世紀）1 点、近現代陶磁器少量

調査区全体（東から）

大堀相馬産の陶器土瓶

溝跡と出土した陶器土瓶

MEMO


観自在王院跡　第15次
空　撮
倉町遺跡 第15次
作業風景
鈴沢の池跡 第4次
全　景
鈴沢の池跡
第4次
倉町遺跡 第15次
作業風景
宿遺跡
第8次
出土かわらけ
坂下遺跡 第16次
全　景
毛越寺跡　第22次
基　壇
観自在王院跡
第15次
作業風景
宿遺跡 第8次
作業風景
宿遺跡　第8次
土　坑
観自在王院跡
第15次
作業風景
坂下遺跡
第16次
平泉文化遺産センター
桜
観自在王院跡
第15次
石敷き
宿遺跡　第8次
全　景
柳之御所遺跡
第85次
観自在王院跡
第15次
出土古銭
毛越寺跡
第22次
作業風景
倉町遺跡 第15次
ビール瓶・レンガ出土
毛越寺跡　第22次
円隆寺
ハ　ス
柳之御所遺跡
第85次
鈴沢の池跡
第4次
倉町遺跡　第15次
全　景